

## 渋沢敬三 財界人と学者のあいだ — 「忙中」に「閑」を求めて

谷 澤 毅

### はしがき

渋沢敬三（1896～1963年）は、大蔵大臣をはじめとする経済関係の要職を歴任した財界の重鎮である。祖父は、「日本資本主義の父」として近代日本経済の礎を築き、ドラッカーもマネジメントの観点から高く評価した渋沢栄一<sup>1)</sup>。孫の敬三は、その血筋とともに能力や人柄を買われ、若くして旧第一銀行の取締役役に就任し、副頭取を経て日本銀行の副総裁、総裁を歴任、終戦直後（1945年）には乞われて大蔵大臣を務め、戦後経済の混乱の收拾にまい進した。その後も、国際電信電話会社（KDD）の初代社長就任をはじめ様々な企業や団体・組織の発足や運営に関与するなど幅広い活躍を見せた彼の一生は、まさに超一流の財界人のそれとして評価できるであろう。

渋沢敬三にはさらにもう一つ、学者・文化人としての顔があった。若い頃から博物学的な関心が強かった敬三は、自宅に「アチックミュージアム」と称された私設の博物館を設け、仲間とともに博物や民族の品々を蒐集し研究の対象とした。財界人となってからの敬三は、経済的に恵まれない研究者を経済的に支援するなど、学問のパトロンとしての活動に力を入れるが、激務の合間を縫って敬三自身も調査・研究活動に従事し、その成果を世に問い続けた。『豆州内浦漁民史料』や『日本魚名集覧』などの貴重

な研究成果の編纂と出版、著作集全5巻にまとめられた国内や海外の詳細な学術的見聞録、『犬歩当棒録』のような学術的エッセイの執筆は、経済界での活動と平行して進められたのである。

さて、会社努めの社会人であれば、一日の大半は会社に拘束されることになる。敬三のように、重役であれば拘束の度合はそれほど強くないとはいえ、逆に重役であるからこそ出席が求められる会合や宴席も数多く存在したことであろう。後で見るように、敬三は数多くの組織や団体の役職を務めるとともに、宴席を大切にするホストでもあった。敬三の場合、学問・研究のために割かれる時間は、アカデミズムの世界の学者と比べれば格段に少なかったとみてよい。財界人渋沢敬三は、いかにして研究者渋沢敬三として生涯を全うさせることができたのであろうか。どのような制約のなかで敬三の高水準の学問的な成果は生み出されたのであろうか。

本稿は、経営学や財界史の観点から財界人としての渋沢敬三の足跡に光を当てるものでも、民俗学や経済史の観点から彼の学者としての功績を評価・顕彰するものでもない。激務に忙殺されたはずの財界人が、どのような制約された条件のなかでいかにして勉強・研究時間を捻出したのかという、はなはだ卑俗な好奇心を出発点として著された雑駁なノートである。

## 1. 渋沢敬三略伝

まずは、渋沢敬三の生涯をあらためて簡単にたどっておこう。敬三の生涯に触れた文献は少なくないが、ここでは、簡にして要を得た網野善彦による敬三の略伝を基とし、適宜内容を補いながら敬三の生涯を追っていきたい<sup>2)</sup>。

渋沢敬三は、渋沢栄一の孫、篤二の長男として1896年(明治29年)に東京の深川に生まれた。幼い頃から生物を愛好した敬三は、ことに魚類に関心を抱き、何時の頃からか生物学者になることを夢見るようになった。しかし、父篤二が廃嫡となったことからその長男敬三が栄一の跡取りと目さ

れるようになった。栄一自身、敬三の実業界での活躍を願っていたことから祖父と孫の間で談判が開始された。どうしても納得ができなかった敬三は、この間親戚を回って「世論喚起」に努め、半年以上持久戦が続いたようであるが、結局は、栄一の「お頼みする」との改めでの真剣な願いに屈することになり<sup>3)</sup>、学問を本業とする人生は断念せざるを得なかった。1915年（大正4年）に敬三が仙台の二高に入学する前の出来事である。

1921年（大正10年）、東京帝国大学経済学部を卒業した敬三は、横浜正金銀行に入行し、その後に結婚、翌年ロンドン支店配属となりイギリスへと向った。ロンドン時代の敬三は、日常の業務のかたわら旺盛な知的好奇心を発揮して美術や音楽に親しみ、長期のイタリア旅行（二回）や北欧旅行も果している。ロンドン時代の敬三の見聞・思索の内容は、著作集第5巻の「ロンドン通信抄」からうかがうことができる。

大正14年に帰国すると正金銀行を退職、翌年に渋沢栄一が長期にわたり頭取を勤めた第一銀行に入行し、30歳（満年齢。以下同じ）にして取締役就任した。その後敬三は、同銀行にて36歳（1932年）で常務取締役、45歳（1941年）で副頭取と順調に出世を重ねる。第一銀行以外でも東京貯蓄銀行（1926年）や東洋生命（1927年）の取締役などを努めたほか、1941年（昭和16年）には全国貯蓄銀行協会の会長を務めるなど諸企業・団体の役職も数多く引き受けていった。

しかし、敬三の学問への思いはやみ難く、こうした財界での活動と並行して学者としての活動が自宅および旅先で繰り広げられていった。既に、1921年には自邸内の物置の二階屋根裏を標本室として動植物、化石、郷土玩具などを収納し、アチック（屋根裏）ミュージアム・ソサエティと命名し、それ以前から続いていた同好の士との会合を重ねていく。1925年にはソサエティを除いてアチックミュージアムと改名し、柳田國男の民俗学に欠けているマテリアルカルチャーの研究へと舵を向け、民具にまつわる蒐集と研究に力を入れていった。1929年（昭和4年）になると、敬三は「祭魚洞」と号するようになった。カワウソ（獺）は獲った魚を、お供え物を

祭るようにして陸地に並べるといふ (鰻祭魚)。その一部を食べて残りを河原に埋めておくのであるが、「いつの間にか忘れてしまうという話から、自分が本をやたらに買込んで、読みもしないで積んでおくことを、もじってつけたものだということである」<sup>4)</sup>。自らの研究のかたわら、早川孝太郎や田村浩などのすぐれた学者の後援や、彼らの出版の援助などにも力を入れるようになった。

1931年(昭和6年)11月、祖父栄一が91歳で永眠すると、敬三は後継者として渋沢同族会の会長を継承する。しかし、跡取りとして、また喪主として約一ヵ月を「ほとんど不眠不休」で働きつづけた敬三は糖尿病を患ってしまい<sup>5)</sup>、東大病院に入院の後、数か月を伊豆での静養に費やすことになった。とはいえ、この伊豆滞在は単なる静養に終わらなかった。滞在中に尋ねた大川家で貴重な文書史料を発見し、これがやがて『豆州内浦漁民史料』の編纂と刊行につながったからである。

帰京した敬三は、入手した文書の整理・出版を推しすすめるとともに、アチックミュージアムに漁業史(水産史)研究室をもうけ、研究者を集めて漁業史研究を推進した。また同じころ塩に関するアンケートを各地に発送しており、これは後年、『塩俗問答集』(アチックミュージアム彙報33、1939年)として実を結んでいる。

敬三は、民具研究や漁業史などそれまでの学界が無視し、学問の盲点となってきた分野に着眼し、みずからの財力をも背景に、そうした分野を開拓しようとする研究者の育成と、彼らの研究の推進に力をそそいだ。旅行も頻繁に実施された。おもに銀行が休みとなる週末を使って同人の研究者らとともに各地の島、半島、漁村、山村などに足を運び、調査をおこない史料を探訪した。1933年には朝鮮半島にもフィールドを拡大している。これらの調査の成果は、参加した人々により『朝鮮多島海旅行覚書』(アチックミュージアムノート、14、1939年)や『瀬戸内海島嶼巡訪日記』(アチックミュージアムノート、16、1940年)などの旅行記としてまとめられている。

そうした旅行を一つの契機として、敬三は銀行での勤務のかたわら自ら研究を積み重ねるとともに、ミュージアムの同人の研究者にそれぞれのテーマで研究をすすめてさせた。宮本常一、山口和雄、祝宮静、岩倉市郎など、民俗学をはじめとする多くのすぐれた研究者が敬三の周辺から育っていった。彼らが研究の成果を発表する場としては、ミュージアムから刊行されている『アチックミュージアム彙報』や『アチックミュージアムノート』があった。例を挙げれば、そこには知里真志保のアイヌに関する民族資料や、自らが漁民である進藤松司が著した漁民の民俗誌、さらには文献の索引なども含まれていた。

一方で、1933年（昭和8年）ころから敬三は祖父栄一（青淵）を記念する事業として実業史博物館の設立を構想するようになった。賛同が得られると、生業にまつわる具体的な「モノ」をはじめとする様々な資料の蒐集が開始された。昭和14年には栄一のかつての住まいで地鎮祭が執り行われ、建設会社も決まったものの着工を目前として戦時色が強まると建設は一時中断してしまった。戦後、場所を移して開館にこぎつけようとしたものの、資料は昭和26年に文部省史料館に寄託されることとなり、結局、実業史博物館設立構想は実現せずに終わった<sup>6)</sup>。敬三は、そのほかにも『延喜式』の史料的重要性に気づかされると延喜式博物館の立ち上げを着想するなど、多様な博物館の設立を提唱している。1936年ころからは、敬三の友人で日本経済史の専門家である土屋喬雄に依頼して祖父栄一の伝記編纂を手掛けるようになった。長期の編纂作業ののち、その成果は『渋沢栄一伝記資料』（渋沢栄一伝記資料刊行会）として1955年（昭和30年）から刊行が開始された。また敬三自身は、1940年（昭和15年）に『豆州内浦漁民史料』が評価されて、日本農学会より日本農学賞を受賞している。

1942年3月、敬三は日本銀行副総裁になり第一銀行を退職、二年後には総裁に就任した。経済面での指揮官となり、戦時経済に深く関わらざるをえなくなった。戦時体制確立のため産業統制や企業合併が進むので、その進展を円滑なものとするために民間人から日銀副総裁を起用してはどうか

との方針に沿っての任命であった。敬三自身には日銀などに行く野心はまったくなく、また、例えていえば「跡取り息子を養子に取られる」ような立場となる第一銀行もこの起用には猛反対した。しかしながら、軍国主義のこの時代ゆえ「サーベルをガチャガチャいわされた」あげく、敬三もついには受諾したという<sup>7)</sup>。終戦の年の3月には、貴族院議員(子爵)に選出された。

アチックミュージアムも、官憲からの追求を避けるために横文字を避けて日本常民文化研究所と改称したが、これはコモンピープルとしての常民についての渋沢の解釈を鮮明にすることともなった。しかし激務のなかといえども敬三は戦時中も、例えば塩をはじめ、「式内水産物需給試考」(1、1941年、2、1942年)などの延喜式に関する考察と執筆を続けたほか、『日本魚名集覧』(第1部、1942年、第2部、1944年、第3部、1943年)の編纂を継続するなど、学問史的にも不朽の意義を持つ研究を結実させていった。

日銀時代にも、敬三は学者・学問の支援を続けた。1942年(昭和17年)6月、第一銀行が創立70周年を迎えるに当たり、同行は金25万円を東大経済学部へ寄付して明治・大正期の金融資料の蒐集と編纂を依頼した。その際に提示された条件は土屋喬雄を主任にということであった。これは、かつて第一銀行で副頭取の地位にあった敬三の土屋に対する配慮である。当時、土屋はリベラルな学者として東大経済学部を追われていた。この成果は戦後1954年(昭和29年)にまとめられ、日銀調査局から『日本金融史資料』(全55巻)として刊行された。支援の手は、官憲の追及をうけたマルクス経済学の研究者にも差し出された。向坂逸郎には、土屋を通じて敬三から金2千円が融通され、大内兵衛には、敬三を通じて日銀に設けられた特別調査室のポストが与えられた。日銀総裁時代には、また田中敬文氏旧蔵(銭幣館)の古銭貨を日銀を通じて買い取らせている。これが母体となって、戦後、日銀貨幣博物館が開設された。学問の基盤を固める努力を、敬三は国家の要人となっても怠らなかったのである<sup>8)</sup>。

1945年、敗戦後の幣原喜重郎内閣の組閣に際し、幣原に説得された敬三は、わずか七ヶ月とはいえ大蔵大臣を務めることになった。大臣としての敬三は、貯金封鎖や新円切り換えの実施、財産税の導入など、日本経済再建のためにきわめて重要かつ大胆な施策をおこなったが、財産税などは、資産家である敬三の家計を急速に悪化させる一因ともなった。さらに、翌年には公職追放となり、かつての使用人の家で畑仕事をするような身にさえなったのであるが、敬三は、自ら「ニコボツ」を心掛け<sup>9)</sup>、周囲の人々への気遣いからか、精神的にはゆとりのあるところを見せたのである。

公職追放時代の敬三は、全国各地を頻繁に旅した。第一回の六学会（のち九学会）連合大会（1947年）では会長を務め、以後学際的な地域研究を主導するとともに、自らの蔵書や文書を基盤に文部省史料館や水産庁資料館を設立すべく心をくだし、さらに、戦前（1937年）、東京の保谷にある民族学協会の附属研究所に寄付していたアチックミュージアムの蒐集による民具二万余点などのコレクションを基に国立民族学博物館の設立のために尽力した（1974年に設立）。アチックミュージアムを母体とする日本常民文化研究所は1950年（昭和25年）に財団法人となった。ここでは、水産庁の委託によって漁業資料の蒐集・整理をおこない<sup>10)</sup>、それが終了した後は民具の研究を推進した。

敬三はまた、絵巻物の資料的価値にも注目し、絵巻物の絵の索引である絵引をつくる着想を抱いていた。これは宮本常一や河岡武春らにより、『絵巻物による日本常民生活絵引』（角川書店、1965～68年、新版・平凡社、1984年）として結実している。

1951年に追放が解除されてからの敬三は、その経験と人柄を見込まれて再び数多くの団体や企業の役職への就任を請われるようになった。1952年（昭和27年）には貯蓄増強中央委員会会長に就任、翌年には国際電信電話株式会社の社長に就任し、1956年に一度退任するものの、1960年には再度就任している（1962年に退任）。1957年には中南米の移動大使となるなど、戦後は繰り返し海外に足を運び、幅広く国際的にも社会活動を展開した。



しかし、1960年に学会出席のため滞在していた熊本で体調を悪化させてからは、入退院を繰り返すなどからだを労わりながらの活動が続くことになる。1963年1月には民族学・民俗学振興への貢献により朝日文化賞が、同年6月には東洋大学より文学博士の名誉学位が授与された。しかし同年8月、以前患った糖尿病を悪化させ再度入院、10月25日に亡くなった。その直後に、勲一等瑞宝章が授与されている。

「明治以後の実業界でこれほどの見識をもち、学問研究に多面的な寄与をなした人物は空前であるといつてよかろう」と、網野善彦は渋沢敬三の生涯を総括している。その研究・事業はいまも神奈川大学日本常民文化研究所により継承・発展させられている。敬三の学問的な業績は『渋沢敬三著作集』全5巻(平凡社、1992～93年)におさめられている。没後50周年を迎えた際(2013年)も、展覧会など敬三の業績を顕彰する催しが開催された<sup>11)</sup>。

## 2. 忙しさの内実 — 役職・旅行・執筆

財界人渋沢敬三は、どのような制約のなかで学問・研究を継続させていったのであろうか。ここでは、敬三を多忙にしていた諸要因のなかから諸企業・団体の役職就任の状況と旅行の実施、それに執筆活動の三つを取り上げ、仕事と研究の両面から彼の忙しさの内実を探ってみたい。

さて、敬三は自らの旅行の記録を集約するに当たり、生涯に以下のような区切りを設けている<sup>12)</sup>。

- |             |                            |
|-------------|----------------------------|
| 1. 中学時代     | 1909年(明治42年)—1915年(大正4年)8月 |
| 2. 二高・東大時代  | 1915年9月—1921年(大正10年)3月     |
| 3. 正金行員時代   | 1921年4月—1925年(大正14年)末      |
| 4. 同族会社時代   | 1926年(大正15年)1月—7月          |
| 5. 第一銀行時代   | 1926年7月—1942年(昭和17年)3月     |
| 6. 日銀・大蔵省時代 | 1942年3月—1946年(昭和21年)5月     |



7. パージ・ニコボツ時代 1946年5月—1953年(昭和28年)3月
8. KDD 社長時代 1953年3月—1956年(昭和31年)9月
9. KDD 会長時代 1956年9月—1958年(昭和33年)5月
10. 諸会長・非常勤時代 1958年5月—1960年(昭和35年)3月

以下、おおよそこの区分に従って検討を加えてみたいが、社会人となる前の学生時代については、ここでは省くことにする。

考察に入る前に、研究者になることを夢見ていた敬三が経済界に進むことを自らに納得させるうえで影響したと思われる、若き日の経験を二つ挙げておこう。

一つは、中学時代におけるエーベリー卿ジョン・ラボックとの出会いである。ジョン・ラボック (Lord Avebury, John Lubbock : 1834~1913年) は、イギリスの銀行家・政治家であるが、敬三と同様、やはり学問の世界への関心も高く、考古学や生物学の領域で貴重な業績を残した学者でもあった。中学時代の敬三は、「我が尊敬するエーベリー卿の蜂蟻に関する研究の一部について」という論文を著している。偉大な祖父を持つ敬三は、もしかしたら自分が将来ラボックと同様の道をたどることになるかもしれないことを、うすうすと感じ取っていたのではあるまいか。両者の経歴には、確かに共通する部分が少なからず見られるからである<sup>13)</sup>。

もう一つは、1917年(大正6年)夏、二高在学中に湯河原で静養中の祖父栄一を訪ねた際のエピソードである。栄一は、以前より手掛け、ようやく完成しつつあった『徳川慶喜公伝』の序文を書き上げ、敬三に声を上げて読んでほしいと頼んだ。以下、息子の渋沢雅英の文章から引用する<sup>14)</sup>。

「晴れた朝で箱根の山気がすがすがしかった。若い父(敬三)は言われるままに、達者な筆で律儀に書かれた原稿を手にとって読み始めた。はじめは何のこともなく読み進んで行ったが、やがてこの文章に宿る栄一という人の気迫と、歴史とともに歩き育ってきたその人生のスケールの大きさが、父の心にぐいぐいと浸透し、魂をゆさぶり始めた。そこには日本の国の生きた歴史が躍動し、日本人の心が渦巻いていた。そして行間には、七

十歳を越えなお火のように燃えている栄一の、国を思い、世を思い、主人を思いやる、正直で真摯な情熱が輝いていた。二、三十分も読み進んでいったが、ついに父は圧倒され、それ以上読むことができず、突然嗚咽と共に泣き伏してしまった。涙がとどめなく流れた」。

これを機に、敬三があらためて自らを栄一の後継者として自覚し、襟を正す思いに駆られたであろうことは想像に難くない。祖父栄一の内面を思いやり、その人生の奥深いところに触れた敬三は、大学卒業とともにラボックと同様、実業界での仕事を生業とする生活を営んでいくこととなる。

以上を踏まえ、敬三の忙しさをつくり出していた要因を検討していこう。

## 役職

敬三が生涯を通じてかかわった企業や団体、組織の数は、確認されているものだけでもじつに305の多きに達している。その中には、日本民族学会や社会経済史学会などの学会や学問研究に関する組織も含まれるので、これらの役職のすべてが勉強や研究の邪魔になったというわけではなかったであろうが、それでもこの数の多さは凡人からすれば驚異的である。1915年(大正4年)、祖父栄一が渋沢同族会社を設立した際に、二高に入学する直前の敬三は19歳にして早くも社長に就任していたのである。

以下、上記の生涯の区分に従って、敬三が就任した新規の役職数を数え上げてみたい<sup>15)</sup>。ただし、就任時期や就任期間がはっきりしない役職も少なからず存在するので、以下で数え上げるのは、該当する時期に新たに就任した役職とそれ以前から就任していたと推測されるものの当該の時期になって初めて就任が確認できる役職を合わせた数とし、それ以前の時期に就任したことがはっきりしている役職はカウントしないこととする。

では、具体的に見ていこう。敬三が社会人となってからまもなく、役職数が一挙に増えたのは1926年のことである。この年、敬三は正金銀行を退社の後、短い同族会社時代を経て同年7月に第一銀行に取締役として入行した。第一銀行をはじめ澁澤倉庫や東京貯蓄銀行の取締役など、この年に

就任した役職及び初めて確認できた役職の数は少なくとも六つとなる。アチックミュージアムの同人代表であることが明記されたのもこの年であるが、おそらく以前からもそうであったと見てよい。

第一銀行時代（1926 - 42年）の約16年間に就任した役職及びこの期間に初めて確認できた役職の数は少なくとも43に及ぶ。年平均にしてみると、一年間で役職数を2.7増やしていったことになる。就任先を見ると、銀行とかかわりのあるところでは東洋生命保険（1927年：取締役）や日本工業倶楽部（1929年：評議員）、貯蓄銀行協会（1931年：設立代表者）、帝国生命保険（1937年：取締役）などがあり、研究とのかかわりでは日本学術振興会（遅くとも1933年：評議員）や日本民族学会（1934年：理事）、農業経済学会（遅くとも1941年：会員）などがある。日本女子大学（1935年：評議員）や大倉商業学校（1936年：協議員）とのかかわりもあった。また、当時の時代、世相を反映する組織として、国民精神総動員中央連盟（1938年：理事）や国民精神総動員委員会（1939年：委員）、中央協力会議（大政翼賛会、1941年：議員）にも名を連ねた。まぼろしとなった東京オリンピックの開催にも協力した。第12回オリンピック東京大会芸術委員会では副委員長（遅くとも1937年）を務めたのである。

日銀・大蔵省時代（1942 - 46年）になると役職就任のペースは急増する。日銀副総裁就任の1942年3月から公職追放の時期を一部含めた1946年12月までの間、この期間に新たに就任した役職及びこの期間に初めて確認できた役職の数は少なくとも61に達した。年平均にしてみると、一年間で役職数を15ほど増やしていったことになる。とりわけ、日銀副総裁就任直後は増加が著しく、1942年3月から同年末までの間に23の新たな役職を確認することができた。金融界と関係する就任先としては、臨時資金審査委員会（1942年：委員）や会社経理審査委員会（1942年：委員）、外国為替管理委員会（1942年：委員）などの内閣に設置された金融関係の委員会をはじめ、日銀内の全国金融統制会（1942年：副会長）、日本証券取引所（1944年：評議員）、中央物価統制協力会議（1944年：副会議長）など、戦時を

反映した組織が目立つ。皇紀二千六百年奉祝会(1944年:監事)や大東亜博物館設立準備委員会(1944年:委員)、戦災援護会(1945年:相談役)などといった組織とも関係を持った。戦後になると、今度は大蔵大臣として日本経済復興協会(1946年:理事)や賠償問題研究懇談会(1946年:会員)などといった復興にまつわる組織に名前を連ねていく。

研究に関係する組織・団体としては、柳田國男先生古希記念会(1943年:発起人)や学士会(1944年:評議員)、民間伝承の会(遅くとも1945年:顧問)などが挙げられる。敬三の研究とは直接関係はなかったであろうが、理化学研究所の理事評議委員を1944年から務めている。貴族院の議員を務めていた時期(1945年3月~46年6月)もあった。

パージ・ニコボツ時代(1946-53年)に移る。少し期間を限定して1947年1月から52年12月までの6年間を見ると、この間に就任した役職及び初めて確認できた役職の数は少なくとも43であり、年平均にすると8.5である。公職追放とはいえ社会と無縁となってしまったわけではなく、パージの時代の敬三は研究に関連する組織を中心に名前を連ねた。1947年の六学会(のちに九学会)連合大会では会長を務め、日本人類学会/日本民族学協会連合大会でも、1951年以降しばしば大会会長に就任した。南方熊楠全集(乾元社版)刊行のためにミナカタ・ソサエティの設立に奔走し、その代表に納まったのもこの頃(1951年4月)のことである。パージ解除(1951年8月)の後、ふたたび学会関係以外の組織や団体の役職就任が目立っていく。

KDD社長・会長時代(1953-58年)になると、様々な組織・団体とのかわりは再び増えていった。区切りをはっきりさせるために1953年1月から58年12月までの6年間で見れば、この期間に敬三が新たに就任した役職及び初めて確認できた役職の数は少なくとも93に達し、年平均にすれば一年間の増加数は15.5となる。大蔵省の専売事業審議会(1953年:委員長)や金融制度調査会(1956年:学識経験者)のような政府関係の委員会に復帰していったのはもちろんであるが、この頃になると国際的性格の強い組

織とのかかわりが増えていったようである。国際学友会（1953年：会長）や国際商業会議所（1954年：国内委員会議長）、国際商業会議所東京総会（1954年：運営会議会長）、デンマーク協会（1956年：会長）、日米協会（1956年：評議委員）などが挙げられる。日本航空（1954年：相談役）や文化放送（1956年：取締役会長）、帝国ホテル（1956年：取締役）、日本電波塔株式会社（東京タワー、1957年：発起人）、名古屋鉄道（1957年：監査役）、富士テレビ（フジテレビジョン、1957年：相談役）など、知名度の高い会社にも名を連ねていった。日本博物館協会（1953年：顧問）や全国離島振興協議会（遅くとも1953年：顧問）、日本塩業研究会（1954年：会長）、湯川記念財団（1955年：設立発起人座長）、日本モンキーセンター（1956年：会長）、社会経済史学会（1957年：顧問）など、文化のパトロン、研究者としての役職就任も続いた。

諸会長・非常勤時代（1958年5月以降）になっても新たな役職の就任は続いた。日本通運（1960年：取締役）や清水建設（1961年：相談役）などの一般企業や日本科学技術振興財団（1960年：顧問）や南極地域観測後援特別委員会（遅くとも1961年：世話人）、東京オリンピック資金財団（遅くとも1961年：顧問）など文化発展のためのパトロンともいえる団体で敬三の経験は生かされた。日本甲殻類学会（1961年：名誉会員）や交通史学会（1963年：設立発起人）のように晩年に至っても学会との新たな関係は見られた。動物愛好会（1962年）では評議委員を務め、小さな親切運動（1963年）では、提唱者の一人として名前を連ねた。

敬三が就任した先の組織や団体には、学会など自らの研究ともかかわるものも少なからず含まれているので、すべての役職の就任が勉強や研究の妨げとなったとはいえない。しかし、これだけの数（305）の役職の就任である。会合への出席など、すべてに忠実に応じたというわけではなかったであろうが、研究時間の確保という点で、やはりかなりの程度妨げとなったであろうことは想像に難くない。

## 旅行実施の状況

次に、旅行の実施状況について見てみよう。渋沢敬三は頻繁に旅に出かけた。その数は、記録されているものだけで通算480回におよぶ<sup>16)</sup>。長期の海外旅行から日帰りの旅まで、日銀・大蔵省時代を除いて毎年かなりの時間が旅に割かれた。これも、各種団体や組織の役職就任と同様、敬三の勉強・研究時間の確保を難しくする大きな要因となったと考えられはする。しかし、数多く実施された旅のかなり部分は研究のための調査・視察旅行であり、日銀支店の視察のための出張など、仕事で遠方に赴いた際にも都合がつけば、空いた時間を自分の研究のためのフィールドワークなどに振り向けることができた。かくて、大方の旅は敬三の研究を促進させた要因として位置づけられるのであるが、一方でまた、机上でのまとまった研究時間の確保を難しくさせたという一面もあった。以下ではあえてこの後者、すなわち、旅がつくり出す忙しさのほうを念頭に置きながら敬三の旅行経験を時期ごとに取上げてみることにしたい。ふだん忙しいはずの敬三がどれだけの頻度で旅に出かけたか、また、可能であれば幾つかの年度をピックアップして、一年間のどれだけの期間が旅に費やされたのかも見てみたい。

ここで依拠する資料は、敬三自らが記録した旅の詳細な実施の記録である。『柏葉拾遺』に収められている「旅譜」には、敬三の旅の詳細なルートとおおよその日程が記録されており、特徴として、記号を用いて鉄道や自動車、徒歩などの移動の手段がしっかりと区別されていることが挙げられる<sup>17)</sup>。とはいえ、すべての旅が完全に網羅されているというわけではなく、1921年(大正10年)のようにノートを紛失したゆえに記録がまったくない年も存在する。この点を踏まえたくて、以下、社会人となつてからの敬三の旅とのかかわりを見ていこう。

まず、正金銀行員時代(1921 - 25年)から見ていくと、この期間はほぼロンドン赴任時代と重なる。それゆえ、この約三年間それ自体を旅行期間中と見なすこともできるのだが、さらに敬三はロンドンを拠点としてイギ

リス国内、ヨーロッパ各地を旅した。1923年（大正12年）には春にパリ、オランダ、秋にはイタリアを旅し、1924年には北欧、25年にはドイツ、オーストリアを経由して二度目のイタリア旅行を経験している。初回のイタリア旅行の見聞は「伊太利旅行記」にまとめられている<sup>18)</sup>。この時期に旺盛な好奇心を発揮して西欧文化の吸収に勤めたことは、既に第1節で指摘した。

短期の同族会社時代の後、第一銀行時代（1926 - 1942年）の敬三は、少なくとも合計136回の旅に出かけている。これは、祖父栄一の誕生の地である血洗島（埼玉県深谷市）への日帰り旅行と1932年の伊豆における長期療養を含めた数である。年平均で見れば、毎年8.7回の旅を実施していることになる（1927年から41年までの平均）。旅行に費やした日数はどうであっただろうか。例えば、1934年（昭和9年）を見ると、この年は10回の旅に出かけ、費やされた日数は少なくとも合計41日となる。銀行員として、これはやはり多いほうであると言えるのではないだろうか。翌1935年はもっと多く、旅行回数は13、それらに費やされた日数は少なくとも80日に及ぶ。一ヵ月以上を要した満州・朝鮮旅行が、そこには含まれる。1928年（昭和3年）から35年まで、敬三は正月になるとほとんど毎年奥三河の「花祭り」調査に出かけた<sup>19)</sup>。ただし1936年の正月は、6日から8日にかけて妻子を連れて赤倉にスキーに出かけている。祖父栄一の没後（1936年以降）は、民俗学関係の旅行が増えた。

重役とはいえ、長期の旅行は休暇の申請が必要だっただろう。しかし、短期間のたいていの旅は週末や休日に実施された。なるべく仕事にしわ寄せが来ないようにとの配慮であろうか、夜行列車を利用することもしばしば見られた。

日銀・大蔵省時代（1942 - 46年）の確認可能な旅行回数は17にとどまった。1944年から46年にかけては、毎年わずか1回ずつである（1946年は5月までをカウント）。それでも、日銀副総裁時代は全国各地の支店の視察を理由として、数は少ないとはいえ比較的長期間の旅行を行っている。1943



年には、4月から5月にかけて「占領地における金融体制の視察」を理由として中国（上海、南京、北京、張家口など）を訪問した<sup>20)</sup>。

しかし、パージ・ニコボツ時代（1946 - 53年）に入るとほとんどの役職から解放された敬三は、再び盛んに各地を旅するようになった。この約7年間の旅行回数は少なくとも合計112回、年平均にして（1947 - 52年）16.8回に及んでいる。旅行回数が多かった年を取上げると、1949年（昭和24年）は20回、旅行に当てられた日数は少なくとも92日となり、一年間の四分の一は旅に費やされていたことになる。1952年（昭和27年）はさらにそれを上回り、年間の旅行回数は23、費やされた日数は確認できるものだけで161日の多きに及んだ。5月から8月にかけての76日の欧米旅行（アメリカ、イギリス、ドイツ、デンマーク、フランス、イタリア、ギリシア、トルコなど）が、ここには含まれる。ちなみにこの年は、往復とも夜行を利用した旅を二回実施している。一つは、鉄道を利用した4月の金沢旅行、もう一つは船を利用した9月の高松、小豆島、京都旅行である。5泊を費やした後者の旅行は、そのうちの4泊が船内での宿泊であった。また、前者は九学会連合の打ち合わせのための金沢行きであった。1950年には、同連合の対馬、壱岐の調査にも参加している（7～8月）。

終戦直後、我が国では車両の不足に加えて占領軍優先のダイヤ設定により、鉄道の輸送状況は極めて悪化していた。窓ガラスが割れたままなど、不十分な設備の列車に多くの乗客が殺到し、すし詰め状態となるのが一般的だった。食糧不足といった悪条件も重なっていた。にもかかわらず、敬三は苦勞をいとわず、鉄道を利用して頻繁に日本各地を旅していたのである。

KDD 社長・会長時代（1953 - 58年）になっても積極的な旅行は続いた。この期間に敬三が実施した旅行は少なくとも81回、年平均にすれば、パージ・ニコボツ時代ほどではなかったとはいえ、それでも15.5回に及んでいる。ことに1954年（昭和29年）は2回の海外旅行（米国旅行と欧州旅行）を含めて21回の旅行が実施され、それらに要した日数は合計で百日を越え、

106日に達している。

戦後第一線に復帰してから後の敬三の旅行を見渡して気づかされるのは、海外旅行の増加である。既に1952年に、欧米、中近東に向けて76日間という生涯最長の海外旅行を経験していたが、1954年に国際商業会議所（ICC）の日本国家委員会議長に就任すると、欧米に行く機会がにわかに増えた。同年1954年には、上記2回の米国と欧州の旅行、翌1955年には欧州、インド、中東に向けて、1956年には欧米、1957年には欧州へと毎年のように欧米に出かけた。1957年にはまた、移動大使として中南米旅行も実施している。1954年に実施された米国行きは、日本航空による招待旅行であった。これら海外での見聞は、『南米通信』をはじめ『雁信集』所載の「日航渡米初飛行招待の旅から」、「ハワイ島通信」、「北欧南欧ところどころ」などからうかがうことができる。

アカデミズムの世界に属している学者とは異なり勤務時間に拘束されている敬三には、勉強・研究のための時間が圧倒的に不足していた。そうしたなかで敬三は、あえて自ら好んで積極的に旅を重ねた。「旅行は父（敬三）の態度や人生観がいちばん素直な形で発揮される場であった。旅に出たときの父は自分の生き甲斐である知的好奇心を遠慮なく全開させることができた」と息子の雅英は回想している<sup>21)</sup>。

旅行は研究素材の収集、思考の深化のための不可欠な手段である。しかし、一面で書齋における研究時間の削減をもたらすマイナス面も持つ。旅先や移動中でも読書や執筆は進められたであろうが、多数の資料を参照する執筆は無理だったと思われる。とりわけ、戦中から戦後の一時期の不自由な時代には、旅先での研究にはかなりの制約が課せられたのではないだろうか。日常的な業務や宴席などの会合、諸企業や団体の役職に加えて敬三は、旅に多くの時間とエネルギーを注いだ。年間を通じて100日以上を旅に費やした年もあった。敬三は、こうした多忙な日々を送ることができるだけの十分な体力の持ち主であったのであろうが、おそらく、からだへの負担はかなり大きかったのではないだろうか。

## 執筆活動

敬三の執筆活動は、このような忙しさのなかで進められた。以下、「渋沢敬三著作一覧」に依拠しながら敬三の著作を時代ごとに概観していくが<sup>22)</sup>、各著作物の内容にまで踏み込んだ分析まではなされていない<sup>23)</sup>。執筆期と刊行期のずれも考慮されていない。書籍か論文か、学術論文か気軽なエッセイかなどのおおよその区分を設けた上で、執筆の量と質を推し量ろうとするラフな考察でしかないことをお断りしておく。

「渋沢敬三著作一覧」によれば、正金銀行員時代の1925年以降、敬三は戦後の混乱の一時期(1946年)を除いて毎年何らかの著作を発表している。第一銀行時代(1926 - 42年)は少ない年(1930年、1934年)で1つ、多い年(1937年)で7つ、ある書籍の「序」や「まえがき」から編著書まで大小さまざまな著作が公表されている。第一銀行時代の初期、「本邦工業史に関する一考察」や「南島見聞録」の連載そのほかが『竜門雑誌』に掲載された。やがて『アチックマンスリー』への各種の投稿が目立っていく。著書として『祭魚洞雑録』(1933年)、また編著として『豆州内浦漁民史料』(上巻、1937年、中巻之1、1938年、下巻、1939年)といった重要な著作の刊行も続いた。「アチックミュージアム彙報」や「アチックミュージアムノート」のシリーズのように、自身の名前が表に掲げられていない場合でも、敬三が刊行に大きくかかわっている著作があった。「著作一覧」に従い、このような刊行物も含めれば、この時期の敬三の著作は、多い年で6つから7つに達していた。

驚くべきことに、こうした著作のペースは、日銀時代(1942 - 45年)となってもあまり変わらない。1942年から44年にかけて、学術的にも貴重と思われる論考・著作がコンスタントに公表されているのである。1943年には6つの著作が公表され、『日本魚名集覧』(第3部)や『豆州内浦漁民史料』(中巻之2)といった敬三の代表作ともいえる著書、編著がそこには含まれる。魚名に関する研究は1937年(昭和12年)から着手されていたとはいえ<sup>24)</sup>、その成果は日銀の副総裁、総裁時代とほぼ重なる時期に刊行さ

れたのである（『日本魚名集覧』第1部、1942年、第3部、1943年、第2部、1944年）。とはいえ、戦争末期から終戦直後にかけてはやはり原稿の執筆とその刊行は難しかったのであろう、日銀総裁時代の1945年初頭に「決戦の新春に寄す」（『財政』10巻1号、大蔵財務協会、1945年1月）という時局を反映したタイトルの一文が刊行されているだけで、大蔵大臣を務め、公職追放（パージ）となった1946年に関しては、著作はない。

大蔵大臣時代のエピソードを一つ挙げよう。大蔵大臣として昭和天皇に財政について報告をした際のこと、敬三は、「延々実に二時間になんなんとするほど陛下と膝を交えて、水産学者としての学問的議論が続いたということである。さすがの陛下も、渋沢さんの退席した後で、「さてあれは何大臣であったか」と自ら反問されたという」のである<sup>25)</sup>。敬三にとってのみならず、生物学者としても高名であった昭和天皇にとってもふさわしいエピソードであるともいえようか。大蔵大臣となっても、敬三の学問に対する関心は失われていなかったのである。

敬三の著作が再び刊行されるようになるのは、1947年の秋になってからである（「考えている村」(1)『時事新報』1947年9月7日）。パージ・ニコボツ時代（1946 - 53年）を迎えた敬三には、時間が豊富にあったと思われるが、1950年までは、執筆された著作の量は以前とあまり変わらず、数からすれば激務のさなかにあった頃と比べてむしろ少なくなったとの印象が得られる。著作数は1947年が3、49年が2、50年が3であり、1948年は著作一覧を見る限りゼロである。食糧不足のさなかに財産を没収された敬三は、自宅の庭での畑仕事に時間を割いた。ただし、旅行に力を入れていたことは先に見たとおりである。

パージ・ニコボツ時代にも学界への大きな貢献があった。例えば、『南方熊楠全集』（乾元社版）の編纂が挙げられる。現在でこそ南方熊楠（1867～1941年）の百科全書的知性、特異な学風はかなり知られるようになったとはいえ、敬三のこの貢献がなければ単行本での著作が少ない熊楠の業績は、戦後の混乱期を経て散逸したままとなり、熊楠は「忘れられた大学者」

となってしまっていたことであろう。1951年4月に敬三はミナカタ・ソサエティの会長となった。同年から翌1952年にかけて渋沢敬三編『南方熊楠全集』全12巻は刊行されたのである。

1953年、敬三はKDDの社長となり実業界の第一線に復帰した。すると執筆量は飛躍的という言葉がふさわしいほどに大幅な増加を見せた。タイトルから判断するとビジネスを題材としたエッセイや身辺雑記と思われる原稿も散見されるものの、大方の文章は、敬三のこれまでの研究や旅先での見聞を生かした「学術エッセイ」と見なしてよいであろう。そうした原稿を中心に敬三の旺盛な執筆活動は諸会長・非常勤時代を経て体調を崩した晩年に至るまで続く。

「著作一覧」に依拠しながら、おもな年の著作数を数えてみよう。KDD社長に就任した1953年は11、これが翌1954年になると一挙に55と増えた。ただし、そこには4月に『河北新報』に連載された「東北犬歩当棒録」（全30回）の一連の学術エッセイが含まれる。これを仮に1つの著作と見なしても執筆原稿は26と以前を上回る数となる。以後、1955年が24、1956年が18と続く。敬三最後の年となった1963年も、12と二ケタ以上の著作が公表された。エッセイに混じって著書・編著の刊行もあった。例えば、上記『河北新報』の連載は同名の『東北犬歩当棒録』として1955年に刊行され、他にも南米旅行の見聞が『南米通信』（1958年）として刊行されるなど、これまでの研究成果の再刊（例えば、角川書店からの『日本魚名収覧』1958年）に加えて新たな著書も生み出されている。最後の年（1963年）には、敬三の父篤二が写した写真を集めた『瞬間の累積』（渋沢敬三編）の刊行を実現させ、没後にも、一連の『絵巻物による日本常民生活絵引』の刊行が続いた（1965～68年）。

敬三は、日常の業務に忙殺されるなかで、以上見たように執筆活動にも時間を割いた。銀行をはじめとして一般人からすれば驚異的ともいえる数の役職に就任し、頻繁に旅行に出かけていたさなかで続けられた著作の刊行である。制約された時間を生かしながらの執筆活動だったことであろう。

日々の努力や積み重ね、工夫が勉強・研究の成果の蓄積をもたらし、著作物へと結実していったにちがいない。後進の指導や学界運営にも、その成果は生かされていった。いったい社会人となってからの敬三は、日々どのような生活を営んでいたのだろうか。いかにして研究時間を確保していたのであろうか。以下、周囲を取り巻く人々の回想や証言をもとに敬三の生き方、暮らしぶりを具体的に見ていくことにしたい。

### 3. 周囲の人々のまなざし

まずは、家族の目に写った敬三の日常から見ていこう。息子の雅英は敬三の時間の過ごし方について次のように述べる。

「戦前は外でどんなに忙しくしていても、帰ってくればすぐ書斎の人となって時間をすごしていた。日曜日など私が隣りの部屋でレコードをかけていても、ぜんぜんおかまいなく調べものをしたり、本を書いたり、学問をつづけて余念がなかったものである」。

「父はいつも、夜、銀行から帰ってくると、真直ぐにアチックや「文庫」に出かけて行き、遅くまで同人と話し込むのが常であった。母屋に帰ってくるのは十二時過ぎ、時には二時、三時になることも珍らしくなかった<sup>26)</sup>。

やはり帰宅後の時間や、旅行に行かない場合であれば休日が学問のための時間に当てられていたようである。敬三の身近にいた宮本常一も、同様のことを述べている。

「先生は会社や銀行から帰って来られますと、たいいてい九時でございますが、それから先生の勉強がすみ、そのあと私は、先生によばれて論争になります。先生がやっと納得して下さるか、または問題を明日にのこし、あるいは課題を与えられて、それではこれから寝ようかというのが早い時は一時、遅い時は三時であったのでございます。そして、しかもそれが毎晩続くので、私などは、しまいにはへとへとになったのでありますが、私の記憶しておりますところでは、そういうような議論が二十日ぐらい続い

たことがあります。いかに学問に対する深い情熱を持っておられたかということがわかるのであります」<sup>27)</sup>。

帰宅後の時間は、宮本をはじめアチックの同人との議論に費やされることが多かったようだ。別のアチックの関係者の回想も見てみよう。1939年（昭和14年）にアチックミュージアムに身を寄せた当初、<sup>こしらえ</sup>拵 嘉一郎はアチックの同人（浜田国義）から以下のようなアドバイスをもらったという。

「渋澤先生は、毎日、朝九時三十分頃から十時頃までの間に自家用車で銀行（当時、第一銀行取締役業務部長）に出勤される。お帰りは会合や宴会などで十時頃になるので、毎晩、先生にお目にかかるのは十時過ぎになる」。

帰宅後の夜遅い時間が、アチックの同人との学問的な議論に当てられていた。さらに拵は、「休日以外は、先生の帰宅なさる十時以降になるので、夜半の十二時は宵の内で、話が佳境に入れば深夜二―三時に及ぶことも決して珍しくはなかった」と渋沢と宮本をはじめとするアチックの同人との会合を回想する。その際の話題は、「研究所を中心とした研究課題、研究方法、研究経過、研究成果など学問的なことから、時には国際情勢や国内の時事問題、あるいは人生談義や雑談にも及び、また時には宴会に変わることもあった」という。敬三にとってこのような時間は、「日々の厳しい銀行業務から開放され、心身ともに安らぎを覚える憩いの場でもあったのか、如何にも楽しそうで、時間が経つのも忘れるほど、リラックスさせておられた」と拵は述べる<sup>28)</sup>。

敬三は、研究・勉強を十分意識した時間の使い方を実践していた。「渋沢には病気以外のときには休息がなかった。土曜も日曜もなかった。いわゆる週末休暇も、ゴルフも、碁将棋の趣味もなかった。人に会って語り、書物を読むこと、研究すること、旅行することがすべてであった」と宮本常一は敬三の生活を総括する<sup>29)</sup>。好きな研究に没頭できることが幸せだったのであろう。



ただし、魚の研究にもつながるためか、釣道楽の一面は持ち合わせていたようである。「舟から釣糸をたれている彼（敬三）のびやかな、おおらかな姿は、いかにも楽しそうに見えた。彼は釣が非常に好きであったのである」と土屋喬雄は述べ<sup>30)</sup>、息子の雅英も、「大正十四年欧州から帰ってきてから、約十五年の間はかなり身を入れて海釣りをしたと父自身も言っている」と伝えている<sup>31)</sup>。また、スポーツは水泳とテニスを少々嗜んだとはいえ、それほど積極的ではなかったらしい。親戚の一人（穂積仲子）は、「あまり運動は好きじゃない。からだのできがそう機敏じゃないでしょうね」と少々手厳しい<sup>32)</sup>。

さて、宮本常一は敬三にとっての「真の研究活動は昭和七年の豆州内浦漁民史料の発見から昭和十七年の日銀副総裁就任までの十余年であり、その後は学界の世話役、リーダーとして、特に日本民族学（文化人類学）の育ての親として、大きな役割を果たした」と述べる<sup>33)</sup>。宮本のいう「真の研究活動」の時代、敬三はいかにして研究時間を捻出していたであろうか。敬三自身の文章から引用しよう。我が国の魚名の研究に力を入れていた頃の回想である。

「・・・昭和十二年一月元旦から本式にやり出し、毎日午前六時半から八時半まで、今から考えるとよく続いたと思うくらい熱中したこと約二年余りに及んだ。一応出来上ってからは日本常民文化研究所（当時アチックミュージアムという）の同人達が全部手わけしてカードにとり、配列をし、原稿に整理し、読み合わせから校正まで引き受けて下さったが、この無味単調な仕事を完遂された芳情は今想い出しても衷心ありがたく思うし、中には既に物故された方もあり感慨は更に深い」<sup>34)</sup>。

出勤前の早朝の二時間が研究の取りまとめに当てられていた。むろん、同人のサポートもあってのことである。「柳田の初期の学業が官僚生活の傍らおこなわれたように、渋沢の研究もまた銀行の重役として勤務の傍らすすめられたもので、机に向う時間はきわめて限られており、朝九時すぎ家を出て、帰宅するのは午後七時ないし八時であった。帰宅するとまた机

に向かう」。「その間に出張もあれば、銀行その他の重役の会合もあって、机に向かう時間はきわめて限られていた。そうした中であって考察は次第にまとめられていった」<sup>35)</sup>。

朝早くて夜遅い生活は、旅先でも同じだったようである。以下は、敬三の旅に同行した人物の座談会での回想である。旅先でも敬三は精力的であった。

「・・・結局先生自分で計画をある程度立てられたんですね。ぼくなんか寝ていると一時ごろ起こされる」。「・・・そういうプランを立てるときには、ほんとうに夢中になってやられる。たいてい十二時・一時より早く寝られることは少なかったんじゃないですか。こっちは眠たかったですよ。とにかくこれはおもしろいプランができ上がったと言って披露する。それで大体日程を立てられるのです。いつ幾日どこへ行って、何時何分にはこうしている、何か必要なことがあったらどここの郵便局あてに電報を打て、一応そういうスケジュールを立てないと、銀行自身困るんですね。これは非常に綿密に立てられたですね。本当に精力的というのか、一品も無駄にしないでね」<sup>36)</sup>。

旅が敬三にとって自己回復のためのかけがえのない時間であったということを示す一つのエピソードがある。佐野眞一が伝えていることであるが、敬三のある遠い親戚（モンゴル研究家磯野富士子）が東北地方へと旅立つ敬三を見送りに行ったところ、敬三は動き出した列車から見送りの人々に「ザマーみろ」と言い放ったというのである。「旅に出てしまえば、渋沢一族の軋轢からも銀行業務の煩雑さからも逃れられる。磯野は、その悲しい捨て台詞に、敬三の全人生が凝縮されているような気がした」と佐野は磯野を介して敬三の心のうちを読み取ろうとする<sup>37)</sup>。

とはいえ、日銀副総裁にもなるとその責任ゆえに忙しさは増し、拘束の度合はさらに増していった。

「それまでの先生は、いつもはつらつとしておられた。時には思いきった政治批判をされたし社会批評もされた。それが副総裁になられてからは、

口をつぐんで居られることが多くなった。それよりも何よりも、夜更におよぶ討論は急に少なくなったし、銀行からのおかえりも、第一銀行時代のように規則正しいものではなくなった。先生の学問に対する関心がうすくなったわけではなく、日々のご生活がいそがしくなってこられたのである」<sup>38)</sup>。

さらに大蔵大臣となると、「大蔵省やそのほか政府関係の様々な人の出入りが激しくなり、秘書官が常時お邸に出入りするようになった。先生(敬三)の身辺警護に当たる護衛官が影のように付き添い、澁澤邸の正門には立哨ボックスが設置され四六時中警官が詰めるなど、先生が最も嫌がるものしい警戒がなされるようになっていった」。そのような時でも、敬三は「相変わらず春風駘蕩としていつもニコニコと」していたと拵嘉一郎は回想する<sup>39)</sup>。

家族には、とりわけ戦後になると別の一面も見せたようであるが、敬三の人柄、気配りのよさには定評があった。例えば、第一銀行時代の敬三は、見習いの若い行員たちと兄弟のように付き合い、「少しも作為なく第一銀行の人たち」に溶け込んでいった。同行のある支店長は、敬三のいきなりの重役就任には反対であったが、実際に会ってみると「コロッと渋沢さんに参ってしまった」と当時を回想している<sup>40)</sup>。日銀においてさえも、敬三は「年の若い少年行員とも全くわけ隔てなく胸襟を開いて接触され、或いは山に、或いは海に、裸になって休日を遊び暮らされた」という<sup>41)</sup>。休日においても学問に専念していたとの先の宮本常一からの引用とは矛盾するが、これも周囲の人々に対する配慮から実行された休日の過ごし方だったのだろう。敬三が来たことにより、「日本銀行の空気というものが非常に変わった」とさえいわれる<sup>42)</sup>。

敬三は学問をこよなく愛したとはいえ、決して謹厳実直なだけの学者ではなかった。他人への気配りが上手な敬三は、宴席の場での「盛り上がり」を常に心掛けた無類のホストでもあった。敬三が亡くなった際、当時大蔵大臣だった田中角栄は、敬三に向けた「弔辞」のなかで「私は先生とお会

いするとき、業務上のお話より先生の幅広く深い人生観にふれるのが楽しみでした」と述べ、さらに「先生は踊りの名手であり、また小唄の大家でもありました」と続けた<sup>43)</sup>。没後、敬三を追悼するにあたり、余興で敬三が披露した踊りに触れた回想がじつに多いのである。それを幾つか引用しよう。

「洪沢さんのお座敷での踊りは「芸」といよりも、まさに「芸術」であった。「・・・まったく独創的なもので、いわゆる玄人の踊りとは質的に違うといっている。それは、流行歌等の歌の文句を、具体的に写實的に踊りの振りに現わす、洪沢さん自身の振付に成るものである」(石野信一)<sup>44)</sup>。

「洪沢君は、非常に好學で、學問研究に熱心であった半面、酒も好きであったし、宴会でかくし芸を披露するのも好きであった。当時、私はほとんど酒が飲めなかったので、「土屋君がもっと酒を飲めるなら、いろいろおもしろい所へつれて行ってやるんだがナ」といつてくれたことがあった」(土屋喬雄)<sup>45)</sup>。

「彼(敬三)は日銀総裁で(講演先に)来た。遊び好きだから踊りのうまいことをみな知っているから、踊らなければすまない。必ず各地方で宴席を設けるでしょう。貯蓄増強運動と言って、まるで反対のことをしているねと言いながら踊っていましたよ」(洪沢秀雄)<sup>46)</sup>。

「洪沢さんの踊りは北海道から九州まで全国に有名であった。自分で振付けせられた「枯すすき」「権兵衛」は早くからの作らしいが、「上野地下道」「赤いりんご」は終戦直後のもの。その後に出た「おいとこ」「石の地蔵さん」などいずれも実によく出来ている」(白根清香)<sup>47)</sup>。

「～酒席での座興の「オイトコソーダヨ・・・」のおどりは、名人六代目菊五郎の所作に彷彿とした、全くの「至芸」であった」(稲生平八)<sup>48)</sup>。

「・・・踊りの中で「リングかわいや、かわいやリング」というのがあるだろう。「赤いリングにくちびる寄せて」あんちゃんがリングを買おうと思って、サイフを出す。「高いやリング」と言っ行って行っちゃうんだ。歴代の大蔵大臣としてこんな傑作はないと思った。「高いやリング」と言っ

てハンチングかぶって通り過ぎていく、リンゴを買わずに」(古野清人)<sup>49)</sup>。

「何か終戦後ですね、ひどく踊りだしちゃったのは。ぼくはおなかへ顔を書いて踊ったのを見たことがありますよ、裸踊りを」(高木一夫)<sup>50)</sup>。

芸の披露は身内の集まりでもなされた。息子の雅英も敬三の踊りをこう回想する。「父はことがあるとよく子供たちや私の家内などを連れて、柳橋や新橋の料理屋に行くこともあった。そんなときほろ酔いの父は、得意の踊りを披露して見せた。「枯すすき」「権兵衛の種まき」など、六代目菊五郎が感心したとかしないとかいう話が伝わっているが、素人目にもなかなか堂に入ってうまかった」<sup>51)</sup>。

敬三がどの程度の酒豪であったかはわからない。おそらく、敬三が愛したのは酒そのものよりも和気藹々とした酒宴の雰囲気だったのであろう。追悼座談会で中山正則は、「・・・飲むと飲めると言って一升飲みましたよ。からだか二十貫以上になって、そのときはいくらかでも飲んだけれど、ほんとうに好きじゃない。ただ空気が好きだった」と述べる。さすがに晩年は弱くなったようであるが、それでも「ビールに氷を入れて薄くして飲んで」いたという<sup>52)</sup>。

酒が飲めなくなってからも、体調を崩した後も敬三は宴席を大切にした。1961年秋、京都で一席設けられたが、前年より入退院を繰り返すようになっていた敬三に立ったままでの踊りはもう無理であった。しかし、「坐ったままで上半身で踊ったり、卓上に指だけでダンスをしたりして興を添えられた」というのである<sup>53)</sup>。敬三の気配りに心打たれる思いをするのは筆者だけではあるまい。

親戚(渋沢一族)との付き合いも、きちんと継続した。以下は、渋沢雅英『父・渋沢敬三』からの引用である。「渋沢家には同族会があり、明治二四年から敬三が亡くなった昭和三八年まで渋沢家の親類が月一回集まった。八〇〇回以上も続いてきた。正月の会合では渋沢家家憲の前文を読み上げるようになっていた。「栄一が亡くなって父(敬三)の代になってもこの習慣はつづけられ、毎月一回、三田の家で同族会が開かれた。正月に

家憲を読む習慣も戦争前までは守られていた」。さらに敬三の叔父の渋沢秀雄は、「同族会で毎月寄るときに、彼（敬三）がちゃんとうまいものを選んでくれる。楽しみでしたよ。帝国ホテルが多かった」と回想する<sup>54)</sup>。名門の一族ゆえの軋轢も少なくなかったと推測されるが、敬三は毎月の同族の集まりに大切な時間を割いてきちんと気を配ったのである。

財界人の敬三にとって勉強・研究のための時間は勤務時間を除いた時間に限られていた。さらに貴重な時間は旅行や宴席、親戚との付き合いにも費やされた。勉強と研究のための時間は帰宅後と出勤前が当てられたという先に見た証言からもわかるように、夜遅く朝早い生活が繰り返された。睡眠時間は極端に少なかったのではないかと思われる。激務と心労、睡眠不足が敬三の生活に祟ることはなかったのであろうか。はたして、財界人と研究者の両立はほんとうにうまくいっていたのであろうか。じつを言えば、きしみのようなものは現れていたのである。ここでは二つを挙げよう。

一つは、疲労と睡眠不足からくる居眠りである。敬三の居眠りが、追悼の座談会でしばしば話題となっているのである。

「支店長会議で渋沢さんが居眠りしていたなんてね。大体総裁のいるところで居眠りしていたなんてことは、考えられないわけですね」（酒井杏之助）<sup>55)</sup>。

「支店長会議のときに、支店長連中が報告すると、正面にすわっておる渋沢さんがグーグー眠っておられる」。「とにかく名人でしたね。あれは一つは糖尿だから居眠りされたというそれもあるんでしょう」（二宮敏夫）<sup>56)</sup>。

「居眠りの名人でよく寝ていても何かちやうどよいところでひょっと目をさまされる」（桜田勝徳）<sup>57)</sup>。

「彼（敬三）は随所で寝られる青淵先生のあれを受けておる。これは会議中だって寝ちゃう。支店長会議だって何だって寝られる。だから精力が持つでしょう。ちょっと五分か十分寝る。自動車の中でも飛行機の中でも寝られる。あれは非常に便利だね」（中山正則）<sup>58)</sup>。

ふだんの移動の車中だけでなく、会議においても敬三は「名人」といわ

れるくらい眠っていたというのである。日頃の睡眠不足、無理な生活の影響はまずはこのような形で表面化していたのであった。

もう一つは家庭への影響である。じつは、戦後の敬三の家庭は崩壊していたも同然であった。

#### 4. 敬三の孤独 — 結びにかえて

1947年、敬三の妻登喜子は家を出た。籍を抜くことはなかったようであるが、公職追放下にあった敬三のもとを妻は去ったのである。最大の理由は、やはり敬三の家庭とのかかわりにあったと言ってよいだろう。長年にわたり、帰宅後の限られた時間を自分の研究やアチックの同人との語らいに優先的に当てていた敬三は、家族の目から見れば、やはり家庭を顧みないいわがままな夫であり父でしかなかった。これについても追悼座談会での回想を引用しよう。

「(敬三は)つかまえにくい。やつは夜遅くまで帰ってこない。・・・午前様だ。帰ってきたら学問のほうでした。だから奥さん弱ったに違いないよ。あれは家庭のいらぬ人だった。家庭がいらぬと言っちゃ悪いけれども」。「家庭的にはサービスが足らなかったようだな」(中山正則)<sup>59</sup>。

「・・・母が非常に不満だった。アチックなんか母にとってはおもしろくなかったでしょうね」(渋沢雅英)<sup>60</sup>。

さらに中山正則は、敬三が帰宅後午前2時か3時まで民俗学を研究していたことを受けて、「それだから家庭生活がなくなる。それで朝またわりあい早い。だから家庭破壊者民俗学ということになる」とさえ言っている<sup>61</sup>。学問的な同志であるアチックの同人や研究、仕事の仲間に見せたような手厚い配慮が家族に示されることは、ほとんどなかったのであろうか。敬三に家族を犠牲にしてまでも学問をという意識が働いていたか否かは不明である。いずれにせよ、仕事と学問の両立を図るべくして営んだ日々の家庭での学問的研鑽は、家族、とりわけ妻からすれば大きな迷惑であったと言



わざるを得ない。

息子の雅英は『父・渋沢敬三』のなかで、KDDの社長に就任した頃の敬三を振り返り、「外での仕事は日を追って忙しくなっていてゆくの、うちでは不思議な無聊を持ってあましているようにみえた」と述べた後、こう続ける。「母がいないことも原因の一つであった。主婦のいない家は、物理的にも殺風景になるものであるが、それ以上に妻に背かれたという事実が、父の心にだんだんと深く沈んでいくおもりのような効果をもたらしていた」。

そんな敬三が一人で没頭するようになったのはトランプであった。さらに雅英の言葉に耳を貸そう。「戦後父はふと一人トランプをやり始めて以来、病気がかなり悪くなるまで、暇な時にはあきずにくり返していた。・・・精神を集中するのにいいということもあるいはあったかもしれないが、私には、やはりそれは戦後の父の生活の中に根ざしていた淋しき、退屈、挫折感、手持ちぶさたなどの一つの表現であるように思われた」。

財界人渋沢敬三は、「忙中」にあって「閑」を求めた。この場合の「閑」とは、研究者渋沢敬三としての時間であり、本稿でもサブタイトルにある「閑」を研究のための時間にあてはめて敬三の生涯に光を当ててきた。しかし晩年の敬三は仕事のための時間でもなく、研究のための時間でもない、まさしく一人で過ごす<sup>ひま</sup>「閑な」時間を設けて無聊を慰めるようになった。他人への配慮を第一に考えた敬三は、周囲の人々に内心を吐露することはほとんどなかったのであろう。それゆえに、「春風駘蕩としていつもニコニコと」していた人格者として評価されることが多い。

しかし、息子には正直な心のうちを漏らしていたのである。雅英はこう回想する。

「誰も僕をわかってくれない。」と父はときどき言った。「どうも人には僕のことはわからないらしい。」父の立場の特殊性もあって、人は父とかく特別視してしまっていて、あまりわかろうと努めない傾向があった。過小評価されたこともあったと思う。若いころは栄一の影があまりにも大きく

て、人は父の心の中に何があるのかを、立止って見ようとしなない場合が多かった。逆に過大評価されたことも多かったと思う。自分のもっていない地位やお金をもっている父に対して、焼餅半分の過大な要求を突きつけるものもあった」<sup>62)</sup>。

敬三の内面を探る作業はぜひとも必要であろうが、本稿ではそこまで手掛ける余裕はない。敬三は自分に対する無理解をじつはかねてより嘆いていたということ、そこに端を発していた孤独感が、妻に去られたことによりさらに増幅されてしまったであろうこと。さしあたりこのような推測を示しておくにとどめる。仕事に研究に、あまりにも忙しい日常は家庭を崩し、敬三の内面にもやはりよくない影響を及ぼした。さらに言えば、もしもう少し節度のある生活を心掛け、家庭もしっかり機能していれば、健康面に異常をきたすリスクは減少し、体調不良となったとしても、もっと早い段階で対応ができていたかもしれない。もっと長く第一線で活躍できたかもしれないのである。

敬三の没後、財界と学界双方へ果した彼の貢献はきわめて高く評価された。「世に芸術を愛好し、学問に理解の深い財界人は少しとしないが、学芸の単なる愛好家、支援者の域にとどまらずに、身をもって研究に従事し、専門家として一家を成した人は極めて稀である。先生（敬三）はまさにこの類稀なる財界人、異例的な学者であった」<sup>63)</sup>。あるいは、当時（敬三没時）東大の学長であった茅誠司はこうも述べる。「学問をほんとうに重んずる立場から財界と学界の橋渡しの役目を喜んで果して頂いた事に対して、私共学界人は、ひとしく感謝の念を捧げずにはおられませんでした」<sup>64)</sup>。

渋沢敬三は、財界と学界の双方に対して第一級の貢献をなした財界人であり学者であった。血筋や能力に加えて他人への配慮を忘れない心遣い、人柄は多くの人々に愛される要因となった。しかし、内面に抱えていた孤独を周囲の人々に見せることはほとんどなかった。加えて、日々の業務をこなしつつ研究を継続し、家庭をあまり顧みることのなかった日常は妻の

別居という事態を招いてしまい、一段と孤独を募らせる原因となった。財界人と学者の間を往還する多忙な日々は、やはり生活にきしみを生じさせてしまった。睡眠不足が招いた重要な会議での居眠りもあった。過度の忙しさは、敬三のような精力的な人間にさえも、結果としてよくない影響を与えてしまったのである。この点を、凡人である我々はしっかりと肝に銘じておこう。

#### 注

- 1) ピーター F・ドラッカー(上田惇生訳)『マネジメント - 課題、責任、実践』上、「序論」、ダイヤモンド社、2008年。
- 2) 網野善彦「渋沢敬三」、鹿野直正・鶴見俊輔・中山敏雄編『民間学事典 人名編』三省堂、1997年、208-210ページ。以下の略伝はこの文献からの引用を多く含む。また、次のウェブサイトも参照した。渋沢敬三記念事業公式サイト「渋沢敬三アーカイブ」[http://shibusawakeizo.jp/about\\_keizo/](http://shibusawakeizo.jp/about_keizo/) (2015年1月20日最終閲覧)。以下は、日銀総裁としての渋沢敬三の略伝を含む文献である。吉野俊彦『歴代日本銀行総裁論 - 日本金融史の研究』講談社学術文庫、2014年。
- 3) 渋沢雅英「敬三という人がいた」、『図録 祭魚洞祭』渋沢敬三没後50年企画展、渋沢史料館、2013年、7ページ。
- 4) 渋沢雅英『父・渋沢敬三』実業之日本社、1966年、50-51ページ。
- 5) 渋沢雅英『父・渋沢敬三』、63ページ。
- 6) 宮本馨太郎「渋沢先生の生涯と博物館」、渋沢敬三先生景仰録編集委員会『渋沢敬三先生景仰録』非売品、1965年、287-288ページ。遠藤武「日本実業史博物館資料について」、『渋沢敬三先生景仰録』、308-310ページ。なお、2006年6月3日の『日本経済新聞』文化欄(44ページ)に「実業史伝える幻の博物館 渋沢敬三が集めた資料整理進む」という記事が掲載された。
- 7) 渋沢雅英『父・渋沢敬三』、83-84ページ。大蔵大臣を辞任した後、敬三は雅英に「本当にあのときはせいせいした。あんなに嬉しいことはなかった」と言い続けたという。佐野眞一『渋沢家三代』文春新書、1998年、252ページ。
- 8) 宮本常一『渋沢敬三』宮本常一著作集50、未来社、2008年、33-34ページ。土屋喬雄「渋沢敬三君の思い出 - 経済学部関係を中心として」、『渋沢敬三先生景仰録』、194-197ページ。向坂逸郎「渋沢敬三君を偲ぶ」、『渋沢敬三先生景仰録』、199-203ページ。
- 9) 「ニコニコ笑ってポツポツ行こう」、「ニコニコしながら没落」の意味。
- 10) 寄贈資料は水産庁資料館に収められ、現在(『民間学事典』出版当時の1998年)では、中央水産研究所が保管しているという。網野善彦「渋沢敬三」、『民間学事典 人名編』、208

- 210ページ。

- 11) 例えば、以下の展覧会が開催された。「渋沢敬三記念事業 屋根裏の博物館 Attic Museum」国立民族学博物館（2013年）など。渋沢敬三記念事業については、注2）のウェブサイトを参照。
- 12) 「旅譜と片影」（『犬歩当棒録』）『渋沢敬三著作集』第4巻、平凡社、1993年、250-460ページ。
- 13) 敬三とラボックとのかかわりについては、以下を参照。河岡武春「敬三の人間形成 - 東京高師付属中学時代を中心として」、渋沢敬三伝記編纂刊行会編『渋沢敬三』上、渋沢敬三伝記編纂刊行会、1979年、722-736ページ。以下の翻訳が岩波文庫に収められていた。ジョン・ラバック（板倉勝忠訳）『自然美と其驚異』岩波文庫、1933年。
- 14) 渋沢雅英『父・渋沢敬三』、33-34ページ。
- 15) 正確に言えば、敬三がかかわった企業・団体の数は305、役職の数は407に及ぶが、ここでは団体の数を役職の数と見なすことにする。『図録 祭魚洞祭』、128-151ページ。
- 16) 1909年から1960年まで。渋沢雅英「解説 旅の人生、父渋沢敬三の思い出」、『著作集』第4巻、468ページ。
- 17) 「旅譜」、中山正則編『柏葉拾遺』柏窓会発行（非売品）、1956年、4-16ページ。晩年に関しては「旅譜と片影」（『犬歩当棒録』）『著作集』第4巻、250-460ページを参照した。また、全体を概観するに際して、渋沢雅英「解説 旅の人生、父渋沢敬三の思い出」、『著作集』第4巻、462-475ページも参照した。
- 18) 「祭魚洞雑録」所収、『著作集』第1巻、183-227ページ。
- 19) 渋沢雅英「解説 旅の人生」、469-470ページ。
- 20) 渋沢雅英「解説 旅の人生」、472ページ。
- 21) 渋沢雅英「解説 旅の人生」、467ページ。
- 22) 「渋沢敬三著作一覧」『図録 祭魚洞祭』、152-158ページ。
- 23) 理由として、筆者が敬三の全著作に目を通すまでに至っていないこと、民俗学の専門家ではないので学術的な内容にまで立ち入った分析が不可能であることを挙げておく。
- 24) 宮本常一『渋沢敬三』、71-72、389ページ。
- 25) 鈴木一「今は亡き渋沢会長を悼む」、『渋沢敬三先生景仰録』、156ページ。この逸話は『産経新聞』1963年10月26日の「渋沢敬三氏（文化放送会長）死去」の記事の中でも取り上げられている。『渋沢敬三先生景仰録』、377ページ。
- 26) 渋沢雅英『父・渋沢敬三』、65-66、119ページ。文庫とは「祭魚洞文庫」のこと。
- 27) 宮本常一『渋沢敬三』、369ページ。
- 28) 拵嘉一郎『澁澤敬三先生と私 - アチック・ミュージアムの日々』神奈川大学日本常民文化叢書7、平凡社、2007年、107-132ページ。
- 29) 宮本常一『渋沢敬三』、352ページ。
- 30) 土屋喬雄「人間 渋沢敬三」、渋沢敬三伝記編纂刊行会編『渋沢敬三』上、259ページ。

- 31) 渋沢雅英『父・渋沢敬三』、51ページ。
- 32) 追悼座談会、『渋沢敬三』上、682-683ページ。
- 33) 宮本常一『渋沢敬三』、256,352ページ。
- 34) 『日本魚名集覧』第一部、第二部の再販(角川書店、1958年)に際しての「序文」を宮本常一『渋沢敬三』、389ページから引用。
- 35) 宮本常一『渋沢敬三』、71-72ページ。
- 36) 追悼座談会における村上清文の発言。渋沢敬三伝記編纂刊行会編『渋沢敬三』上、1979年、509-510ページ。
- 37) 佐野真一『旅する巨人 - 宮本常一と渋沢敬三』文藝春秋、1996年、137-138ページ。  
佐野真一『渋沢家三代』、237ページ。
- 38) 宮本常一『渋沢敬三』、395ページ。
- 39) 拵嘉一郎『澁澤敬三先生と私』、160ページ。
- 40) 山口和雄「敬三と銀行」、『渋沢敬三』上、765-766ページ。武田晴人「実業家・渋沢敬三 - 日本銀行時代の横顔」、『特別展 渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館』図録、2013年、190-191ページ。
- 41) 酒井杏之助(元日銀総裁)「埋め難い空虚感」、『渋沢敬三先生景仰録』、119ページ。
- 42) 追悼座談会のなかでの酒井杏之助の回想。『渋沢敬三』上、1979年、555ページ。
- 43) 田中角栄「甲辞」、『渋沢敬三先生景仰録』、85ページ。
- 44) 石野信一「お座敷の芸術」、渋沢敬三伝記編纂刊行会編『渋沢敬三』下、241-242ページ。
- 45) 土屋喬雄「人間 渋沢敬三」、『渋沢敬三』上、260ページ。
- 46) 追悼座談会、『渋沢敬三』上、670ページ。
- 47) 白根清香「渋沢さんを悼む」、『渋沢敬三先生景仰録』、173-174ページ。
- 48) 稲生平八(当時森永製菓専務取締役)「うらやましかった静かな心境」、『渋沢敬三先生景仰録』、171ページ。
- 49) 追悼座談会、『渋沢敬三』上、494ページ。
- 50) 追悼座談会、『渋沢敬三』上、682-683ページ。
- 51) 渋沢雅英『父・渋沢敬三』、133-134ページ。
- 52) 追悼座談会、『渋沢敬三』下、606-607ページ。
- 53) 山下太郎(当時山下新日本汽船社長)「五猿会」、『渋沢敬三先生景仰録』、166ページ。
- 54) 追悼座談会、『渋沢敬三』上、671ページ。
- 55) 追悼座談会、『渋沢敬三』上、555ページ。
- 56) 追悼座談会、『渋沢敬三』上、611ページ。
- 57) 追悼座談会、『渋沢敬三』上、611ページ。
- 58) 追悼座談会、『渋沢敬三』上、670ページ。
- 59) 追悼座談会、『渋沢敬三』上、474、698ページ。
- 60) 追悼座談会、『渋沢敬三』上、698ページ。敬三の妻登喜子は岩崎弥太郎の孫。「深窓の令

嬢として西洋風ハイカラな教育を受け」た登喜子は、「百姓や漁師がきたない格好で自由に出入りするアチックに最後まで好感をもてなかった」という。佐野真一『渋沢家三代』、253ページ。

- 61) 追悼座談会、『渋沢敬三』下、424ページ。
- 62) 渋沢雅英『父・渋沢敬三』、119、181ページ。
- 63) 東洋大学理事長「弔辞」、『渋沢敬三先生景仰録』、102ページ。
- 64) 茅誠司「弔辞」、『渋沢敬三先生景仰録』、89ページ。